



TITLE:

II.概要

AUTHOR(S):

CITATION:

II.概要. 霊長類研究所年報 2007, 37: 2-27

ISSUE DATE:

2007-07-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166477>

RIGHT:

II. 概要

1. はじめに

2006 年度(平成 18 年度)の研究所の研究・教育ならびに社会貢献の概要を以下に述べます。詳細については、それぞれの報告をご覧ください。

組織としては、教員約 40 名、大学院生約 40 名、ポスドク等の研究者約 20 名、それに事務ならびに技術職員が、常勤ならびに非常勤をあわせて約 40 名です。大学院生・ポスドク等の約 20%が海外からの国費留学生というところに本研究所の特徴があります。フランス、オーストラリア、アメリカ、インドネシア、バングラデシュ、ミャンマー、中国、スリランカと多様な国々です。

合計して約 140 名の所員に対して、17 種約 800 個体のサル類を飼育しています。これら人間を含めた霊長類が、官林の約 3.2 ヘクタールの敷地内にひしめいていました。しかし、本年度末にリサーチ・リソース・ステーション(RRS)が新たに善師野キャンパス(第 2 キャンパス)として発足し、より自然に近い豊かな環境でサル類を飼育する将来が開けてきました。

新たな動きとしては、本年度 10 月 1 日より、研究所としては初めての寄附講座(研究所に設置された寄附講座は、正式には寄附研究部門と呼びます)が発足しました。「比較認知発達(ベネッセコーポレーション)研究部門」です。2 名の教員が着任しました。人間の認知機能や親子関係の発達の霊長類の基盤を探る研究が、今後さらに推進されるでしょう。国の方針としての、一般運営費交付金すなわち人件費ならびに物件費の抑制が続く中、研究の新たな発展のためには、こうした外部資金の導入が必須です。「京都大学らしい、京都大学でしかできない研究をさかんにおこなっていただきたい」という寄附者の期待に、ぜひお応えしたいと思います。

それぞれの研究者が、主として文部科学省の科学研究費補助金等の助成により、ユニークで多様な研究を推進しています。そのほかに多様な受託研究等もあります。そうした個別研究とは別に、大別して 3 つの大きな事業が研究所全体の事業として継続しています。

第 1 は、文部科学省の支援する「リサーチ・リソース・ステーションによる環境共存型飼育施設(RRS)」の事業です。RRS は、里山の自然を活かしたすばらしい環境でサル類を飼育し、多様な霊長類研究を支援する事業です。現キャンパスから北東 2 km の場所で、東海自然歩道の通る愛知県と岐阜県にまたがる丘陵地帯の山すその里山に位置します。名鉄の保有する約 70 ヘクタールの山林のうち、南の山すその約 10 ヘクタールを利用し

て緑豊かな環境での飼育をめざしました。里山の林をフェンスで囲っただけの簡素なつくりです。自然に近い環境でニホンザルが暮らしています。放し飼いにしている場内があまりに広いので、どこにサルがいるかすぐには見えません。旧来の飼育方法の常識を破る、日本から発信するユニークな飼育形態といえるでしょう。2 場で 1 式となる運動場を用意し、「移牧」あるいは「交牧」とでも表現すべきでしょうか、一方の運動場でサルを飼育し他方は休ませて緑を回復させます。そうした屋外運動場形式の飼育と平行して、受胎日を調整し父親を選別するための計画的出産の必要上、グループケージ方式で飼育する育成舎も造りました。またユニークな試みとして、1500t の排水貯留槽を設け、いっさいの排水を場外に出しません。浄化した水をポンプアップして場内に散水し蒸散させるシステムです。雨水さえも 2000t まで調整池にいったん貯め置きます。RRS は、新しい理念である「環境共存型飼育施設」をめざした事業です。まず 2005 年度に措置された施設整備費で、善師野に第 2 キャンパスが整備され、約 10 ヘクタールの土地でニホンザルの繁殖供給事業を推進する施設が整いました。ついで 2006 年度から 5 か年計画で、特別教育研究経費事業(戦略的研究、拠点形成型)として、RRS 事業が認められました。なお、この RRS 事業は、国の推進するナショナル・バイオリソース事業(RR2002)の一環であるニホンザル・バイオリソース・プロジェクト(略称 NBR、拠点機関は生理学研究所、伊佐正代表)と連携した事業です。

第 2 は、日本学術振興会の支援する「21 世紀 COE プログラム」事業である、「生物多様性研究の統合のための拠点形成」(代表者：佐藤矩行、京都大学-A2)です。霊長類研究所はそのすべてが、大学院教育においては、理学研究科生物学専攻の一員であり、その協力講座と位置づけられています。つまり生物科学専攻の 4 つの系、動物学・植物学・生物物理学・霊長類学、の一翼を担っています。その生物科学専攻が、全体として 21COE 拠点に採択されています。本拠点は、京都大学の伝統である野外生物学研究と最近発展のめざましい分子生物学研究を統合して、世界最高レベルの研究を推進し、「生物多様性科学」という生物学における基盤的な「知の体系」を構築するとともに、ミクロ生物学とマクロ生物学の有機的な統合体系のもとで大学院教育を推進することを目的としたものです。2006 年度は 5 年間のプログラムの最終年度でした。なお、後継事業であるグローバル COE プログラムの審査があり、「生物進化と多様性研究のための拠点形成—ゲノムから生態学まで」(代表者：阿形清和)という事業が、2007 年度から新たに 5 年間継続することになりました。

第3は、日本学術振興会の先端研究拠点事業で、「人間の進化の霊長類的起源(HOPE)」という国際連携研究を目的としたものです。HOPEは、先端研究拠点事業としての第1号の採択です。2003年度末(2004年2月)に、日本学術振興会とドイツのマックスプランク協会のあいだで研究協力の覚書の交換がおこなわれました。それを基礎として、京都大学霊長類研究所とマックスプランク進化人類学研究所の共同研究としてHOPE事業が開始されました。2年間の拠点形成型を経て、2006年度から3年間は、国際戦略型に移行して継続しています。現在では、アメリカのハーバード大学人類学部等、イギリスのケンブリッジ大学人類学部等、イタリアの認知科学工学研究所等との連携もできて、ここに日独米英伊の先進5か国による、霊長類研究の国際連携体制が整備されました。このHOPE事業の特色としては、全国共同利用の霊長類研究所が拠点となって、京都大学のみならず全国の大学その他の研究機関に属する者を支援し、共同研究、若手研究者派遣、国際集会の開催をおこなっていることです。また、野生ボノボや野生オランウータンの研究など、多様な海外調査も支援してきました。2006年度には、HOPE国際シンポジウム「人間の進化の霊長類的基盤」を名古屋で開催しました。

以上、こうした3つの時限の大型プロジェクトと平行して、霊長類研究所の本務である「全国共同利用」研究もさかんにおこなわれました。自由課題と推進課題と施設利用という、研究所が戦略的にとってきた3種類のユニークな区分にしたがって、本年度も多くの研究者を全国から募り、多様な霊長類研究を推進しました。共同利用研究会も例年どおり活発におこなわれています。また、総長裁量経費その他のご支援を得て、ギニアのコナクリで、ボッソウ野生チンパンジー研究30周年記念国際シンポジウムを開催いたしました。ボッソウでは、杉山幸丸元所長が開始した野外研究が30年間継続しています。

研究所全体が取り組む新たな事業として、「野生動物研究センター(仮称)構想」を将来計画委員会と協議員会で検討を重ねています。これは、ニホンザル野外観察施設の改組拡充を中核として、自然の生息地での野生動物保全を推進し、大学と動物園やサンクチュアリとの提携をすすめる、野生動物保全学、動物園科学、人と自然の共生学、といった新しい研究領域を開拓する試みです。「ひと科4属の共生を中心とした野生動物保全研究」と題した特別教育研究経費(連携融合)の事業を、2008年度(平成20年度)からの概算要求として新たに掲げました。

大学院教育は、生物科学専攻の協力講座として粛々

と執りおこなわれています。教育の成果として6つの博士学位を授与しました。論文博士3件、課程博士3件です。学部教育には、全学共通科目として「霊長類学のすすめ」(京都開催)「霊長類学の現在」(犬山開催)という2つの講義科目のほか、新入生のためのポケットゼミナール(少人数ゼミ)も2つ提供しています。

社会貢献としては、犬山で開催する公開講座と市民公開日、東京で開催する東京公開講座に加えて、2007年度からは創立40周年を期して京都公開講座もおこなっています。学部学生向けには、オープンキャンパスを開催しています。また、インターネットを活用して、さまざまなデータベースの公開と、ホームページの充実をおこなっています。この年報も、後述する「外部評価報告書」も、すべてPDF化されて公開閲覧に供しています。また、和文のパンフレットを改定増刷するとともに、広報委員会が新たに3つ折の簡易版の研究所紹介リーフレットを作成しました。

2006年度に特別な動きとして、京都大学の17部局(研究所・研究センター)の代表世話役部局を霊長類研究所が勤めました。その役割の一端として、京都大学に附置されている研究所や学内の研究センターの広報のための一般公開セミナーをしました。2007年3月に、第2回「京都からの提言」と題して、大阪で開催しました。また、吉田地区の旧官舎を改修して、2階建ての民家なのですが、「吉田泉殿」と命名した連携交流拠点を作りました。2007年7月1日から全学の利用に供されます。当面は研究所群の負担で運営しますが、全学の教職員が利用する施設です。畳の部屋で自由闊達な議論が進むことをめざしています。また時計台に、松下電気のご好意を得て大型液晶パネルを設置し、研究所・研究センターの紹介・案内ができるようになりました。

研究と教育以外の変化についても言及します。学校教育法の改正に伴い、2007年度当初から教員の制度が変わりました。従来の教授、助教授、助手という職階の呼称が改められました。本研究所では、従来のものが教授、准教授、助教という職階に移行しました。2006年度の協議員会では、助教の人事を凍結して議論を積み重ね、教員制度の将来像を検討しました。その結果、新たに導入する助教については、2007年度採用以降は、任期制を導入することに決定しました。任期7年、再任は1回のみで5年です。こうした任期制導入に伴い、再任審査の手続きも整備しました。また教員人事の進め方についても従来の方式を改めました。外部の運営委員も参加する人事委員会を構成し、その委員会に原案作成を付託する方式です。なお、運営委員会それ自体についても規約を改定し、外部の研究者コミュニティの声をさら

に広く収集できるような体制に改めました。

この年報それ自体を自己点検評価報告書と位置づけていますが、別途、「外部評価報告書」を本年度末に作成し公表しました。外部評価報告書の出版公表としては10年ぶりのこととなります。そこでは、この10年間の研究と教育について実証的な資料を提示し、それをもとに約20名の外部評価委員の皆様にご意見をいただきました。貴重なご意見を賜った皆様方に厚く御礼申し上げます。

2007年6月1日の創立40周年記念に向けて、出版・講演会・同窓会名簿の整備等を企画推進しました。とりわけ全教員が分担して執筆した「霊長類進化の科学」(京都大学学術出版会)が上梓されています。霊長類学の研究の最前線を、正確にかつわかりやすくまとめた書物です。ぜひ手にとってごらんいただきたいと思います。

すでに述べたように、本年度は、リサーチ・リソース・ステーション事業により新たな建物が竣工しました。この施設は、研究所としては1995年3月竣工の類人猿行動実験研究棟(約2500平米)の新営以来の大掛かりな施設です。自然の里山の景観と環境を生かして、研究用のニホンザルの繁殖育成と多用な研究の推進を企画しています。いわばRRS発足の記念すべき年度ですので、本稿の以下においては、その竣工に到るまでの経過の概略を述べ、記録に留めたいと思います。

RRSの実現には1967年の研究所創設以来の多年の努力がありました。1969年に、サル類保健飼育管理施設が創設され、自家繁殖体制を確立するために、特に実験利用が多いと想定されたニホンザルとアカゲザルを中心に野生由来個体の導入がおこなわれました。

1980年代初頭に、研究所は自家繁殖体制をすでに確立しました。1981年には年間100頭の研究用個体の供給を果たしています。1986年、「サル類の飼育管理および使用に関する指針」を自主的に策定しました。この種のガイドラインとしては全国に先駆けたものであり、他の学会等のガイドライン策定の手本となりました。その後2002年には「飼育サル用ガイドライン」として改訂しています。

こうした実験動物としてのサルの利用と平行して、1989年には、野生サルの研究利用に関する指針も策定しています。「野生霊長類を研究するときおよび野生霊長類を導入して研究するときのガイドライン」です。

RRS事業の主要な経過をまず概説します。1993年3月、最初の候補地である犬山市郊外の今井パイロットファームの土地利用を犬山市と交渉し始めました。久保田競所長の在任時期です。その後、候補地は今井パイロットファームから、東大演習林、そして現在の善師野地区

小野洞に変わりました。杉山幸丸所長(1995 - 1998年度)の在任4年間のご尽力により、RRS事業推進の核となる組織、「人類進化モデル研究センター」が1999年度に発足しました。その発足と同時に小嶋祥三所長(1999 - 2002年度)が就任しました。小嶋所長は、この新センターを核として、現在のかたちとなるRRS事業の青写真を作り、その推進の種を撒いて育てました。茂原信生所長(2003 - 2005年度)の時代になって、実際にRRSの施設整備費や、事業費である特別教育研究経費が措置されて、RRS事業が現実動き始めました。そうして2006年度末の竣工を迎えたわけです。歴代の所長と所員各位のご尽力があって完成しました。

以下では、RRS事業の経過を詳述し記録に留めます。1993年3月に、「犬山サルの森構想」について犬山市と最初の交渉が始まりました。話し合いの結果、それまでは無縁であった霊長類研究所と犬山市との連携をまず深めようということになり、1993年7月21日、犬山市の図書館に「サル文庫」が発足しました。全国でもきわめて珍しい、霊長類の書籍のみを収集した蔵書コーナーです。そのほかに、地元の小学生を研究所に招いての講義や、市民公開日や、市の主催する講演会への講師派遣などが実現しました。

その後、研究所では1994年7月に「所外の土地利用の将来構想を考えるワーキンググループ」を将来計画委員会のもとに発足させました。そこで10回の審議を重ね、1995年3月の協議員会で最終案を取りまとめました。「京都大学霊長類研究所フィールドステーション(FS)構想」です。犬山市郊外に大規模な放飼場を建設する計画です。すでに霊長類研究所は、創設以来、サル類の自家繁殖の体制を確立してきました。つまり野生のサル類を保護しつつ、飼育下で繁殖した個体のみを実験研究に供する体制です。しかし、急速な宅地化がすすみ、約3.2ヘクタールの現在地で、当時25種類800頭近いサルのなかまを狭隘な施設で飼育せざるをえない状況でした。動物福祉の理念にそって快適な環境でサル類を飼育する限界に近づいている、という認識でした。ワシントン条約で、人間以外の霊長類はすべて、絶滅の危機に瀕しているか、そのおそれのある野生動物と規定されています。また、霊長類は、哺乳類のなかではめずらしく、木の上でくらすようになったものたちです。人間の福祉向上のために彼らの命をいただくことはやむをえないとしても、自然の野山に近い、広々とした環境で健康なサルを飼いたい。本来の暮らしをさせてはじめて、多様な霊長類研究が展開する。そういった認識のもとに、犬山市郊外の「今井パイロットファーム」約100ヘクタールを候補地とした当初構想を立てました。なお、霊長

類研究所と犬山市の連携のシンボルとしての市立図書館「サル文庫」は、14年後の今日も続いています。

1995年4月、共同利用研究所外無償供給事業が開始されました。所内では遂行できない共同研究に限り、実験用にサルを所外に供給(貸与)する体制が整備されたわけです。当初は年間3頭の供給でした。その後、年間10-20頭規模に拡大しました。

1996年から、来たるべき1998年度概算要求を目標として、施設の名称変更を伴う組織整備と、今井の土地取得、その両方をめざしました。実際には組織の要求を先にすべきであるという本省と大学本部の指導があった。1999年4月に、RRS推進の核となる研究組織が整備されました。それまで「サル類保健飼育管理施設」という名だった実験動物の付属施設が、拡充改組されて、教授2名・助教授1名・外国人客員教員1名が純増され、現在の「人類進化モデル研究センター」が新たに設立されたのです。新センターは、従来の飼育霊長類すなわち「旧世代ザル」とは一線を画した「新世代ザル」の育成を目標に掲げました。本来の発想であるフィールドステーション構想に添った施設を建設し、自然に近い環境で親やなかまと暮らしつつ、一方で、その遺伝的特性や生理的特性が明確に把握され、多様な科学研究の基盤となるサル類、それが「新世代ザル」という理念です。

2000年11月、日本霊長類学会から捕獲した野生ニホンザルの実験利用について声明が出されました。「当面は、実験利用はやむをえないが、長期的には飼育下繁殖体制の確立が必要である」というものです。

2000年12月、「サル・ネット」の最初の準備会がありました。サル類の実験研究利用を推進する研究者のネットワークです。これがのちのニホンザル・バイオリソース・プロジェクト(NBR)の母体となるものです。科学研究費「統合脳」から支援を得て、関係者が集合しました。杉山前所長、小嶋所長、松林センター長はじめ所外の研究者など関係する方々が一堂に会して、繁殖施設の建設とそれまでの暫定措置について議論し協力を約しました。

2001年2月、RRS計画(今井と東大演習林)の概算要求が初めて本省に行きました。しかし、この大きな構想に対して、学術機関課およびライフサイエンス課ともに厳しい意見でした。

2002年3月、研究所は今井で計画したフィールドステーション構想を、新たに発足した人類進化モデル研究センターによって推進していたのですが、そこに生命科学の研究の基盤整備をめざす「ナショナル・バイオリソース」計画(RR2002)がもちあがりました。ニホンザルをそのバイオリソースのひとつとして位置づけ、生理学

研究所を中核機関として文部科学省に申請する計画です。生理学研究所の伊佐正、東大の宮下秀樹のご両名がその計画の中核で、霊長類研究所にも応分の協力が求められました。生命科学の研究の基盤整備に国が動き始め、日本神経学会、日本生理学会、日本霊長類学会などから日本学術会議や総合科学技術会議へ出された要望を受けて、ニホンザルの繁殖供給がその候補として動き出したのです。

2002年4月、RRSの基本構成計画(2004年度概算要求への基本説明資料)ができました。RRSでは新しい価値をもった研究用サル類の創出育成とその基礎研究をおこなうという目標です。当時の研究用サル類の保有頭数20種約800頭、繁殖頭数約120頭でした。それを最終的にほぼ2倍の規模(保有頭数1600頭、繁殖予定頭数250頭)にすることを計画しました。このうち約350頭は、日常的に実験に使用するために官林キャンパスに残します。したがってRRS計画のうち、新たな取得土地で保有するのは、差し引き1250頭になります。繁殖予定頭数250頭のうち、半数を超える頭数を所外供給する予定でした。種別の保有個体数も明記されました。つまり、研究所の研究用サル類保有の将来構想です。原猿(ワオキツネザル)20頭、新世界ザル3種(フサオマキザル、リスザル、ヨザル)60頭、小型新世界ザル2種(マーモセット、タマリン)40頭、特殊病原体フリー(SPF化)を果たしたマカク2種(ニホンザル、アカゲザル)300頭、オナガザル10種500頭、小型類人猿(テナガザル)2種12頭、大型類人猿(チンパンジー)20頭です。そのほかに、実験用グループケージで飼育するもの(マカクザルを主として各種)300頭、という全体計画でした。

RRSは、霊長類研究所の多年にわたる独自構想です。それに対してNBRは、国の推進する生命科学研究の基盤整備の事業です。それが2002年度から、ある意味で緊密に連携を取りながら進んできました。RRSの側からいうと、まず研究利用のニーズの高いニホンザルから整備していこうという計画です。国の推進する実験動物としてのニホンザルの繁殖供給事業と、霊長類研究所が多年にわたって実践してきた自家繁殖の技術と、人類進化モデル研究センターを推進の核として「新世代ザル」を育成したいという研究所の理念という、3つの流れが時機をえて融合したのが、リサーチ・リソース・ステーション事業だといえるでしょう。

幸い、文部科学省ならびに京大本部の各位のご理解と努力があって、2003年度に現在のRRSの原型となるパイロット事業が研究所敷地の北隣の借地で、第4放飼場と第5放飼場として始まりました。環境共存型屋外飼育施設を試験的に建設する、東大演習林との共同研究で

す 2003 年 10 月 9 日には、RRS に関する所員説明会を、全所員を招集して実施しました。「RRS 計画は研究所の独自の概算要求計画で、研究所が維持してきた 20 種 800 個体の多様なサル類の将来計画である。一方、NBR は、岡崎生理学研究所が中核機関となっている国のライフサイエンス支援事業である。NBR の預託を受けて、霊長類研究所はニホンザルの繁殖供給事業を、RRS 計画の一環としておこなう。NBR 事業をおこなっても、所員ならびに共同利用研究員の使うサル類については引き続き無料とする。RRS 計画は、善師野地区小野洞で展開する第 2 キャンパス構想として実現する」というものです。この所員集会での説明で示された構想が、現在の事業方針にそのまま受け継がれています。

2004 年度の国の予算として、特別研究充実設備費が措置され、RRS 事業を推進するために必要な基盤整備として、検疫舎の改修その他の官林地区の整備をおこないました。パネル型の建材を組み合わせた新方式のニホンザルの屋外運動場や、多目的研修室も整備されました。そして、年度末の 2005 年 3 月には、NBR の預託を受けたニホンザル供給のため、最初の母群導入を果たしました。同時に、2 年間にわたる東大演習林との共同研究の成果を「サルと森との共生条件」として出版しました。

その 2005 年 3 月の協議員会で、以下の重要事項を報告し承認されました。2005 年度予算で 5 億 3 千万円の施設整備費がついた(敷地造成、管理棟 1、育成舎 1、連結式放飼場 2 の建設費用)。名鉄との土地交渉が 2005 年度に始まる 20 年間償還で受結した。施設環境部が善師野地区小野洞の南 10 ヘクタールの調査に着手した。NBR へのニホンザル供給は、現在の要求どおりの施設ができたとして、年間 100 頭程度となる(所外供給するニホンザルはすべて NBR を窓口とする。所内と共同利用は従来どおり無料とする)。以上の重要事項であり、その骨組みは今も受け継がれています。

犬山市の全面的な支持と協力を得て、地元への説明会を真摯に積み重ねた結果、最終的にそのご理解を得ることができ、翌 2006 年 5 月に本格的に着工の運びとなりました。まる 1 年間をかけた環境調査で、工事予定地の里山の谷筋には、ギフチョウの食草であるカンアオイの生えていることが確認されていました。そこで、人類進化モデル研究センターの景山・松林両教授をはじめとする職員の手で、着工前に、その一本一本をていねいに上流部に移植しました。鹿島建設をはじめとする建設に携わってくださった方々は、限られた時間のなかで懸命な作業を続けてくださいました。そして、2007 年 3 月、ようやく竣工を迎えることができました。

それと平行して、本年 2006 年度からはじまった特

別教育研究経費(平成 18 - 22 年度計画)によって、RRS 事業はその研究・教育・社会貢献の真価が問われる段階になりました。RRS 事業は、歴代の所長をはじめとした協議員各位、そしてそれを支えてくれた多くの事務職員・技術職員の方々、さらにはその業務を補助してくださった非常勤職員の皆様方の力を結集して成し遂げられました。文部科学省、京大本部、研究所、それぞれの場所でたくさんの方々が永年にわたって支援して下さってできました。そのことをここに銘記したいと思います。

近年、サル、クマ、シカといった森の動物たちが人里に降りてきて、悪さをするという話をよく耳にします。「有害鳥獣駆除」という名のもとに、昨年度は 5 千頭を越すクマが捕獲されました。一部は山に返されましたが、4 千頭を超える数のクマが撃ち殺されています。じつはサルも、毎年 1 万頭もの野生ニホンザルが捕殺されています。いわゆる猿害で頭を悩ませる行政にとって、捕獲したサルの実験利用は、ある意味で、ありがたい解決です。サルの命をむだにしないで済みます。研究者は無料でサルを手に入れます。でも、そうした駆除と利用の構造を許すと、野生のサルの暮らしを守る保証がなくなります。人間の側のいわば勝手な論理で、際限なく駆除されるおそれがある。実際、貴重な地域の群れが全滅する可能性も指摘できます。また研究者の側にとっても、いつ生まれたのか年齢さえわからない、親が誰かも定かでない、しかもどのようなウイルスや細菌に感染しているかわからない、そうしたサルを扱う危険から逃れられません。

RRS は、ニホンザルの実験研究のための利用を下支えしつつ、野生の群れに決定的なダメージを与えないように配慮する、ひとつの人間の知恵だと思います。これが最終的な根本的な解決ではないでしょうが、人間の福祉向上に必須な生命科学や神経科学その他の研究を推進しつつ、野生のニホンザルの保全を考えていくうえで、ひとつのモデルとなるユニークな事業だと思います。

京都大学の理念は、「地球社会の調和ある共存」です。リサーチ・リソース・ステーションの第 1 期工事の竣工は、日本人とニホンザルの共存に向けたささやかな一歩だと思います。これからも、人間にとっても、サルたちにとっても、よりよい未来が開けるように努力していく所存です。ニホンザルを端緒として、チンパンジー、テナガザル、オマキザルなど、人間以外の霊長類の保全と福祉の向上にさらに努めてまいります。

以上をもって、2006 年度の研究所の活動の概要報告といたします。

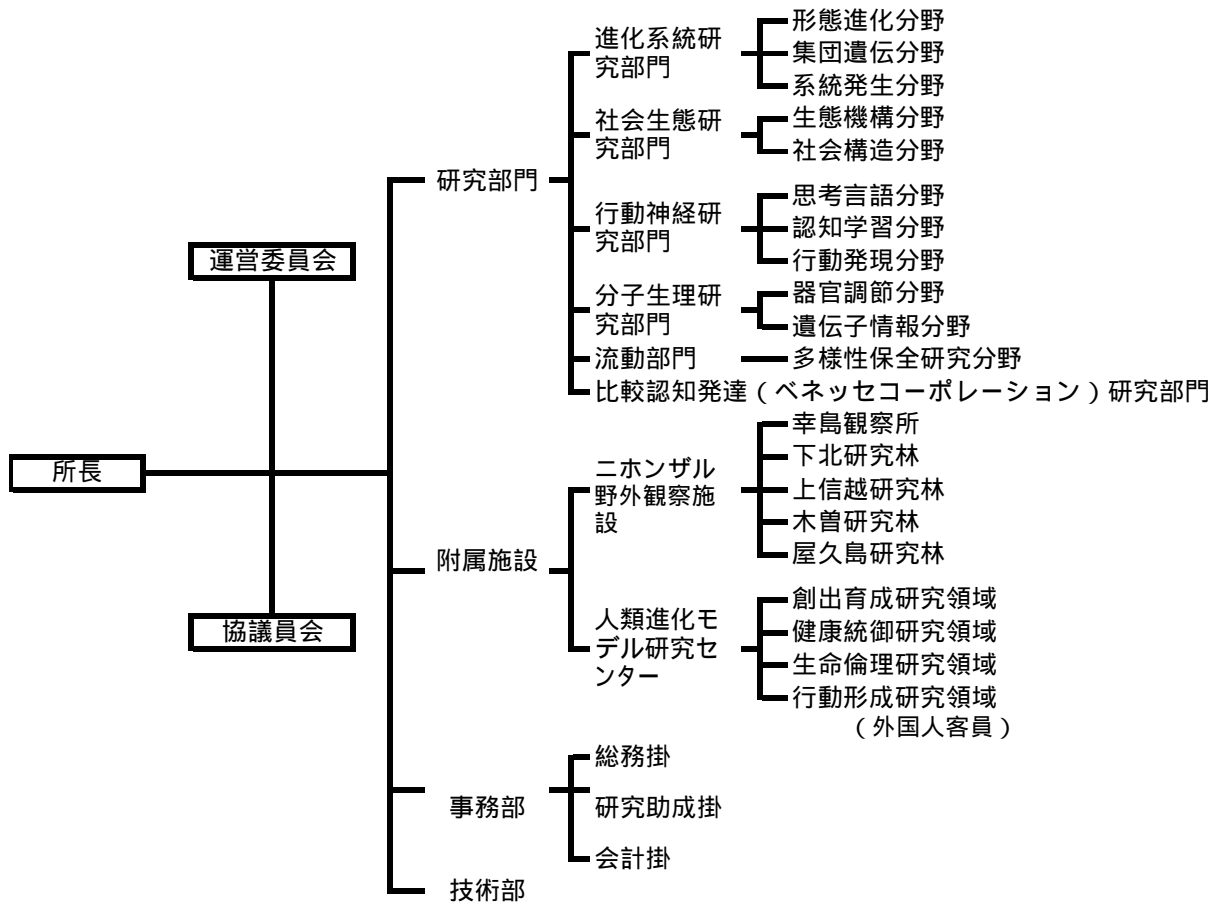
(文責：松沢哲郎)



RRS 空中撮影

2. 組織

(1)組織の概要（2007年3月31日現在）



所長	松沢 哲郎	
運営委員	杉山 幸丸	（東海学園大学人文学部 教授）
（順不同）	諏訪 元	（東京大学総合研究博物館 助教授）
	長谷川 壽一	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
	西田 利貞	（日本モンキーセンター 所長）
	高畑 由紀夫	（関西学院大学総合政策学部 教授）
	山極 壽一	（京都大学大学院理学研究科 教授）
	片山 一道	（京都大学大学院理学研究科 教授）
	景山 節	（霊長類研究所 教授）
	林 基治	（霊長類研究所 教授）
	川本 芳	（霊長類研究所 助教授）
事務長	井山 有三	

職員の内訳

教授	助教授	助手	事務職員	技術職員	小計	非常勤（時間）	合 計
10	14	13	8	12	57	71	128

大学院生，研究者等の内訳

博士課程	修士課程	外国人共同研究者	研修員	特別研究員	受託研究員	研究生	合 計
24	17	3	1	2	1	3	51

(2)所員一覧(2006年度)

形態進化分野 Fax:0568-61-5775

遠藤 秀紀	教授
濱田 穰	助教授
毛利 俊雄	助手
國松 豊	助手
早川 清治	技術職員
清水 大輔	非常勤研究員
茶谷 薫	教務補佐員
水谷 典子	事務補佐員
権田 絵里	大学院生
山本 亜由美	大学院生
小薮 大輔	大学院生

集団遺伝分野 Fax:0568-62-9554

川本 芳	助教授
田中 洋之	助手
川本 咲江	技能補佐員
澤村 育栄	事務補佐員
川合 静	大学院生
Feeroz, Mohhamed Mostafa	外国人研究員(客員分)

系統発生分野 Fax:0568-65-0536

高井 正成	教授
相見 満	助教授
江木 直子	非常勤研究員
佐藤 阿佐子	事務補佐員
Thaung Htike	大学院生
鈴木 智起	大学院生
Zin Maung Maung Thein	大学院生

生態機構分野 Fax:0568-63-0565

Huffman, Michael, Alan	助教授
橋本 千絵	助手
松原 幹	非常勤研究員
座馬 耕一郎	研修員
早川 祥子	研修員
笠原 聡	教務補佐員
広瀬 しのぶ	事務補佐員
Nahallage, Charmalie A.D.	大学院生
Jaman, Mohammad F	大学院生
松岡 絵里子	大学院生
Garcia, Cecile Marie Claire	外国人共同研究者
Hernandez, Alexander Danny	外国人共同研究者
Mbangi, Mulavwa	招へい外国人学者

社会構造分野 Fax:0568-63-0564

半谷 吾郎	助教授
杉浦 秀樹	助手
藤田 志歩	非常勤研究員
金子 陽子	技術補佐員
大井 由里	事務補佐員
鈴木 真理子	大学院生

思考言語分野 Fax:0568-62-2428

松沢 哲郎	教授
友永 雅己	助教授
田中 正之	助手
堀 鈴香	技術補佐員
井上 紗奈	教務補佐員
大橋 岳	教務補佐員
落合(大平)知美	教務補佐員
野上 悦子	教務補佐員
戸塚 洋子	教務補佐員
酒井 道子	事務補佐員
打越 万喜子	学振特別研究員
松野 響	大学院生
Martinez, Laura	大学院生
山本 真也	大学院生
佐藤 義明	大学院生

認知学習分野 Fax:0568-62-9552

正高 信男	教授
松井 智子	助教授
南雲 純治	技術職員
加藤 朱美	技術補佐員
渡邊 直子	技術補佐員
新谷 さとみ	派遣職員
久保(川合)南海子	学振特別研究員
三浦 優生	研究生
内山 リナ	研究生
親川 千紗子	大学院生
木場 礼子	大学院生
平石 博敏	大学院生
山口 智恵子	大学院生
福島 美和	大学院生
橋本 亜井	大学院生
澤田 玲子	大学院生
Lemasson, Alban	招へい外国人学者
Blois ép Heulin Catherine	招へい外国人学者

行動発現分野 Fax: 0568-63-0563

三上 章允	教授
宮地 重弘	助教授
脇田 真清	助手
瀧澤 大輔	非常勤研究員
井上 雅仁	教務補佐員
鈴木 冬華	事務補佐員
猿渡 正則	大学院生
半田 高史	大学院生
石川 直樹	大学院生
平井 大地	大学院生
小野 敬治	大学院生
鴻池 菜保	大学院生

器官調節分野 Fax: 0568-63-0576

林 基治	教授
大石 高生	助教授
清水 慶子	助手
国枝 匠	技術補佐員
毛利 恵子	技術補佐員
金武 ひろみ	事務補佐員
託見 健	大学院生
檜垣 小百合	大学院生

遺伝子情報分野 Fax: 0568-62-9557

平井 啓久	教授
今井 啓雄	助教授
中村 伸	助手
浅岡 一雄	助手
天野(早野)あづさ	非常勤研究員
光永 総子	教務補佐員
平井 百合子	技能補佐員
檜垣 小百合(併)	技術補佐員
出井 早苗	技術補佐員
橋本 寛之	技術補佐員
宮田 正代	事務補佐員
和田 晃	受託研究員
田中 美希子	大学院生
Jeong, A-Ram	大学院生
村田 貴朗	大学院生

流動部門(多様性保全分野)

香田 啓貴	助手
-------	----

比較認知発達(ベネッセコーポレーション)研究部門

佐藤 弥	寄附研究部門助教授
林 美里	寄附研究部門助手
高島 友子	技術補佐員

ニホンザル野外観察施設 Fax: 0568-62-9575

渡邊 邦夫	教授
室山 泰之	助教授
村井 勅裕	非常勤研究員
鈴木 克哉	教務補佐員
村井 倫子	技術補佐員
阿部 恵	事務補佐員
山田 彩	大学院生
Rizaldi	大学院生
郷 もえ	大学院生
張 鵬	大学院生
神田 恵	大学院生
原澤 牧子	大学院生
李 保国	外国人研究者(客員分)
幸島観察所 Tel: 0987-77-0045/Fax: 0987-77-0251	
冠地 富士男	技術職員
鈴木 崇文	技術職員

人類進化モデル研究センター Fax: 0568-62-9555

景山 節	教授
松林 清明	教授
上野 吉一	助教授
鈴木 樹里	助教授
宮部 貴子	助手
熊崎 清則	技術職員
阿部 政光	技術職員
釜中 慶朗	技術職員
前田 典彦	技術職員
渡邊 朗野	技術職員
森本 真弓	技術職員
兼子 明久	技術職員
渡邊 祥平	技術職員
西脇 弘樹	技術職員
竹元 博幸	非常勤研究員
上野 寛子	教務補佐員
安江 美雪	技術補佐員
小林 陽子	技術補佐員
猪飼 良子	技術補佐員
柴田 早苗	技能補佐員
山根 若葉	技能補佐員
江口 聖子	技能補佐員
廣川 類	技能補佐員
梅田 せつ子	技能補佐員
近藤 ひろ子	技能補佐員
葉栗 和枝	技能補佐員
伊藤 和子	技能補佐員
立木 昌子	技能補佐員
六鹿 きよみ	技能補佐員
朱宮 幸子	技能補佐員
熊谷 かつ江	技能補佐員
横江 実穂子	技能補佐員

堀内 ゆかり	技能補佐員
木村 俊治	技能補佐員
津川 則子	技能補佐員
須田 直子	研究生
東濃 篤徳	大学院生
小倉 匡俊	大学院生
Sri Kantha Sachithanantham	外国人研究員(客員分)
Leo, Natalie Pui Lin	外国人共同研究者

情報検索室

福富 憲司	
-------	--

HOPE担当

多久島 直美	事務補佐員
--------	-------

自己点検・評価委員会

加藤 みどり	事務補佐員
--------	-------

事務部 Fax: 0568-63-0085

井山 有三	事務長
-------	-----

総務掛

松永 裕之	掛長
西村 元一	事務職員
松澤 美津子	事務補佐員
菅原 喜美子	事務補佐員
後藤 知子	事務補佐員
横江 美奈	事務補佐員
大藪 陽子	事務補佐員
井本 安志	労務補佐員

研究助成掛

神田 俊明	掛長
原田 重代	事務補佐員
大津賀 幹子	派遣職員
図書室	
高井 一恵	事務職員
池田 早苗	事務補佐員
斉藤 千代子	事務補佐員
服部 美里	事務補佐員
宿泊棟	
安東 和子	労務補佐員
佐々木 啓子	労務補佐員
多目的ホール	
日比野 恵美子	労務補佐員
敷島 美香	労務補佐員
大須賀 美恵	派遣職員

会計掛

戸嶋 充雄	掛長
本有 健一郎	主任
松山 耕治	事務職員
小川 幸枝	事務補佐員
小野 範子	事務補佐員

(3) 大学院生

2006 年度生物科学専攻（霊長類学系）

氏名	学年	指導教員
小倉匡俊	M1	上野吉一
小野敬治	M1	三上章允
鴻池菜保	M1	宮地重弘
小藪大輔	M1	遠藤秀紀
澤田玲子	M1	正高信男
橋本亜井	M1	松井智子
原澤牧子	M1	室山泰之
松岡絵里子	M1	M.A.Huffman
川合静	M2	川本芳
神田恵	M2	室山泰之
佐藤義明	M2	松沢哲郎
Jaman Mohammad Firoj	M2	M.A.Huffman
Zin Maung Maung Thein	M2	高井正成
平井大地	M2	三上章允
福島美和	M2	正高信男
村田貴朗	M2	平井啓久
鈴木智起	M2	高井正成
石川直樹	D1	三上章允
鈴木真理子	D1	渡邊邦夫
張鵬	D1	渡邊邦夫
山口智恵子	D1	正高信男
山本真也	D1	松沢哲郎
C.A.D.Nahallage	D1(H18.10 で D2)	M.A.Huffman
木場礼子	D2	正高信男
Rizaldi	D2	渡邊邦夫
半田高史	D2	三上章允
平石博敏	D2	正高信男
Martinez Laura	D2	松沢哲郎
Thaung Htike	D2	高井正成
親川千紗子	D3	正高信男
Jeong A-Ram	D3	平井啓久
託見健	D3	林基治
林美里	D3(H18.9.30 退学 ,寄附研 究部門助手 に採用)	松沢哲郎

氏名	学年	指導教員
東濃篤徳	D3	景山節
松野響	D3	友永雅己
山田彩	D3	室山泰之
檜垣小百合	D3	林基治
郷もえ(休学中)	D3	室山泰之
権田絵里(休学中)	D5	濱田穰
山本亜由美	D5	濱田穰
田中美希子	D5	平井啓久
猿渡正則	D6	三上章允

(4) 研究支援推進員

氏名	採用期間
猪飼良子	2006 年 4 月 1 日 ~ 2007 年 3 月 31 日
梅田せつ子	2006 年 4 月 1 日 ~ 2007 年 3 月 31 日
葉栗和枝	2006 年 4 月 1 日 ~ 2007 年 3 月 31 日
小林陽子	2006 年 4 月 1 日 ~ 2007 年 3 月 31 日
熊谷かつ江	2006 年 4 月 1 日 ~ 2007 年 3 月 31 日
近藤ひろ子	2006 年 4 月 1 日 ~ 2007 年 3 月 31 日
横江実穂子	2006 年 4 月 1 日 ~ 2007 年 3 月 31 日

3. 予算概況

予算概要

(金額の単位はすべて千円)

運営費交付金	人件費	534,381
	物件費	133,841
	物件費(教育研究充実設備費)	346,680
	施設整備費補助金	0
	計	1,014,902
外部資金	受託研究費(7件)	64,186
	受託事業費(2件)	557
	文部科学省科学研究費補助金(25件)	104,750
	21世紀COE補助金(1件)	35,100
	厚生労働省科学研究費補助金(1件)	500
	日本学術振興会先端研究拠点事業(1件)	27,346
	日本学術振興会二国間交流事業(日本学術振興会前渡資金, 2件)	2,925
	寄附金(6件)	35,488
	間接経費	31,563
	全学共通経費	63
	計	302,478
合計		1,317,380

(1) 2006年度(平成18年度)受託研究費 内訳一覧

研究種別	研究代表者	金額	研究課題
文科省 RR2002(自然科学研究機構)	松林清明	42,728	ニホンザルの繁殖と供給に関する調査研究
戦略的創造研究推進事業(科学技術振興機構)	正高信男	800	言語習得の身体的基盤の認知神経科学的研究
戦略的創造研究推進事業(科学技術振興機構)	大石高生	600	脳脊髄損傷からの機能回復における軸索構造の変化
宇陀市	室山泰之	200	宇陀市に生息する野生ニホンザルの生態研究
環境省地球環境研究総合推進費(日本モンキーセンター)	松沢哲郎	12,784	大型類人猿の絶滅回避のための自然・社会環境に関する研究
社会技術研究開発事業(科学技術振興機構)	正高信男	400	学習困難をもつ子どもの心理課題遂行時の脳内機序の解明および支援プログラムの評価
戦略的創造研究推進事業(科学技術振興機構)	宮地重弘	200	サルを用いた行動発達の神経機構の解析
農水省・農林水産研究高度化事業委託費(森林総合研究所)	室山泰之	2,935	獣害回避のための難馴化忌避技術と生息適地への誘導手法の開発
精神・神経疾患研究委託費(国立精神・神経センター)	平井啓久	2,000	コモンマーマセットの血液キメラに関わる細胞遺伝学的研究
シーズ発掘試験(科学技術振興機構, 東海)	中村伸	1,539	骨粗鬆症の改善作用を有する新規大豆たんぱく質の開発と応用
合計	10件	64,186	

金額は、間接経費を除く

(2) 2006 年度（平成 18 年度）受諾事業費 内訳一覧

研究種別	研究代表者	金額	研究課題
ジェイ・ワン・プロダクツ（株）	中村伸	557	サルモデルでのバイオメディカル研究
合計	1 件	557	

(3) 2006 年度（平成 18 年度）文部科学省科学研究費補助金 内訳一覧

研究種別	研究代表者	金額	研究課題
基盤研究(A)	遠藤秀紀	450	鶏の形態嗜好に関する日本とタイの多面的比較感性モデル
基盤研究(B)	國松豊	2,300	ユーラシアの化石ヒト上科に関する古生物学的研究
基盤研究(B)	遠藤秀紀	3,900	インドシナ・スンダセルフ領域における脊椎動物多様化機構の生物地理学的解析
基盤研究(B)	友永雅己	3,000	動的表象の形成と知識 - 知覚の相互作用：その比較認知科学的検討
基盤研究(B)	高井正成	1,600	アジア地域におけるオナガザル上科の進化に関する古生物学的研究
基盤研究(B)	濱田穰	2,900	インドシナ半島におけるマカク属の進化：アカゲザルとカニクイザルを主として
基盤研究(B)	川本芳	4,800	生物多様性への移入種の影響：和歌山タイワンザル交雑群に関する総合的研究
基盤研究(B)	三上章允	3,300	テナガザル視物質遺伝子の多様性に関する研究
基盤研究(C)	遠藤秀紀	3,400	動物遺残体科学を構築するための自然史博物館協力機構の基盤形成
基盤研究(C)	室山泰之	800	人為的環境を利用する野生ニホンザルの土地利用と環境選択
基盤研究(C)	清水慶子	1,000	大豆イソフラボンの生殖内分泌系への作用：サルをモデルとした検討
基盤研究(C)	橋本千絵	800	野生チンパンジーとボノボの行動レパートリーの比較による文化的行動の研究
基盤研究(C)	正高信男	1,500	コミュニケーションにおける「心の理論」と社会的認知の相互的発達の検証
基盤研究(C)	今井啓雄	2,300	分子置換法を用いた視覚機能における光受容体機能の総合的理解
若手(B)	杉浦秀樹	800	ニホンザルにおける個体群動態：密度効果と群間・群内競合の検討
特定領域研究	宮地重弘	2,000	記憶のメカニズムに関わる前頭前野，側頭連合野，海馬をつなぐ神経回路の解明
特定領域研究	清水慶子	2,500	霊長類の脳の形態的および機能的性分化の特性
特別推進研究	松沢哲郎	60,300	思考と学習の霊長類的基盤
特別研究員奨励費	山本真也	1,000	チンパンジーにおける互惠的利他行動と他者理解の比較認知科学的検討
特別研究員奨励費	LEO.N.P	1,200	霊長類とシラミと共生細菌，およびシラミにより感染する細菌の進化史

特別研究員奨励費	HERNANDEZ A.D.	1,100	屋久島におけるニホンザルと寄生虫を支える食物網の構造とエネルギー論に関する研究
特別研究員奨励費	川合（久保）南海子	1,100	加齢にともなう表象の操作能力の変化と脳機能に関する実験的研究
特別研究員奨励費	打越万喜子	1,100	思春期テナガザルの異性の歌に対する感受性 - 感覚性強化の認知実験 -
特別研究員奨励費	松野響	900	チンパンジーにおける視覚的運動情報の処理とその理解：ヒトの視覚認識との比較研究
特別研究員奨励費	林美里	700	チンパンジーの対象操作と道具使用における認知発達
合計	25 件	104,750	

金額は、間接経費を除く

(4) 2006 年度（平成 18 年度）21 世紀 COE 研究拠点形成費補助金 内訳一覧

研究種別	研究代表者	金額	研究課題
21 世紀 COE 研究拠点形成費	正高信男	35,100	生物多様性研究の統合のための拠点形成
合計	1 件	35,100	

(5) 2006 年度（平成 18 年度）厚生労働省科学研究費補助金 内訳一覧

研究種別	研究代表者	金額	研究課題
長寿科学総合研究事業(主任研究者 国立長寿医療センター・丸山和佳子)	鈴木樹理	500	老化に伴う認知症に有効な神経保護薬の臨床応用とその評価法の確立
合計	1 件	500	

(6) 2006 年度（平成 18 年度）日本学術振興会先端研究拠点事業 内訳一覧

研究種別	研究代表者	金額	研究課題
先端研究拠点・国際戦略型(HOPE)	松沢哲郎	27,346	人間の進化の霊長類的起源
合計	1 件	27,346	

金額は、間接経費を除く

(7) 2006 年度（平成 18 年度）日本学術振興会二国間交流事業（日本学術振興会前渡資金）内訳一覧

研究種別	研究代表者	金額	研究課題
日仏交流促進事業（SAKURA）	正高信男	850	霊長類の社会性が音声コミュニケーションに与える影響
ロシアとの共同研究（RFBR）	高井正成	2,075	ユーラシア大陸北部における霊長類の進化に関する古生物学的研究
合計	2 件	2,925	

(8) 2006 年度 (平成 18 年度) 寄付金 内訳一覧

補助金等種別	研究代表者	金額	研究課題
(財) 日本食品化学研究振興財団	中村伸	1,960	食品添加物・人口甘味料の安全性・健康影響に関するサルモデルを利用した遺伝子・分子レベルでの評価試験
(財) トヨタ財団	川本芳	784	豚猿の研究 - 消えゆく民間信仰の記録とサルをめぐる日本及びアジアの自然観の研究
光科学技術研究振興財団	今井啓雄	784	光科学技術の研究に対する助成
藤森工業株式会社 研究所	中村伸	490	サルモデルでの止血・血栓系に関する研究
松井智子	松井智子	1,470	霊長類に関する総合的研究 (ヒト言語発達音声データベースの作成)
(株) ベネッセコーポレーション	松沢哲郎	30,000	乳幼児期の発達, 子育て, 家族に関する人間とそれ以外の霊長類の比較研究
合計	6 件	35,488	

寄附金額は、全額共通経費 (2%) を控除した金額

4. 図書

霊長類学の研究成果を網羅する方針で図書を収集しています。特に霊長類学関係論文の別刷は年間 2500 件あまりを受け入れ、『霊長類学別刷コレクション』として閲覧に供しています。書籍については全所員からの推薦を受け付け、選定の参考にしています。

(1) 蔵書数

2007 年 3 月末現在、本研究所図書室に所蔵されている資料は、以下の通りです。

和書：7,219 冊（製本雑誌も含む）

洋書：16,239 冊（製本雑誌も含む）

霊長類学関連別刷（霊長類学別刷コレクション）：81,670 点

(2) 資料の所蔵検索

図書室で所蔵している図書・雑誌はすべて【京都大学蔵書検索 KULINE】で検索できます。

【京都大学蔵書検索 KULINE】にアクセスし、[詳細検索画面] - [所蔵館] の欄で [(82)霊長研] を選択すると、霊長類研究所の蔵書のみヒットします。

詳しくは京都大学図書館機構のホームページをご覧ください。

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

霊長類学関連別刷（霊長類学別刷コレクション）は【霊長類学文献索引データベース】で検索できます。

霊長類研究所ホームページの topics【霊長類学文献索引データベース】をご覧ください。

<http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/library/books.cgi>

(3) 霊長類研究所図書室利用規程

I. 開室時間と休室

1. 開室時間

平日：9 時から 17 時まで。

2. 休室

土曜日、日曜日、国民の祝祭日、年末・年始は休室とする。

その他の臨時休室は、その都度掲示する。

II. 閲覧

1. 閲覧者の資格

- 1) 本研究所の所員。
- 2) 本研究所の共同利用研究員。

3) 1), 2) 以外の、京都大学に所属する者で、所属図書施設の紹介のある者。

4) その他一般利用者。

2. 閲覧

1) 閲覧は所定の場所で行わなければならない。

2) 次の各号に掲げる場合には閲覧を制限することができる。

(1) 当該資料に独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成 13 年法律第 140 号。以下「情報公開法」という。）第 5 条第 1 号、第 2 号及び第 4 号イに掲げる情報が記録されていると認められる場合における当該情報が記録されている部分。

(2) 当該資料の全部又は一部を一定の期間公にしないことを条件に個人又は情報公開法第 5 条第 2 号に規定する法人等から寄贈又は寄託を受けている場合における当該期間が経過するまでの間。

(3) 当該資料の原本を利用させることにより当該原本の破損若しくはその汚損を生じるおそれがある場合又は当該資料が現に使用されている場合。

III. 貸出及び返却

1. II の 1 の 1) の該当者及び、2) のうち予め利用者カードを提出した者は、下記に従い図書を借用できる。すべての借用資料は、原則として所外に持ち出すことはできない。

1) 借用資料の種類と借用方法

a. 単行本

(i) 単行本は 1 か月間借用できる。

(ii) 借用時には、ブックカード及び代本板用紙に必要事項を記入する。ブックカードは所定の箱に入れ、代本板用紙は代本板の背に挿入して、書架上の本のあった位置に置く。

b. 製本雑誌

(i) 製本雑誌は 3 日間借用できる。

(ii) 借用方法は単行本に準じる。

c. 未製本雑誌

(i) 未製本の雑誌は 15 時から翌朝 10 時までの間に限り借用できる。

(ii) 借用時には貸出カードに必要事項を記入する。

d. 別刷

(i) 別刷は開室時間中に図書室内でのみ利用できる。

(ii) 利用後は、返却台の箱に返却する。

e.他機関からの借用資料

(i) 他機関からの借用資料は、開室時間中の図書室内での利用に限る。

(ii) 利用後は図書係員に返却する。

2) 参考図書その他禁帯出扱いの図書は貸出さない。

3) 借用中の資料を転貸してはならない。

4) 再手続きをすることにより貸出期限の延長ができる。ただし、他に借用希望者がある時は、他を優先する。

5) 借用後の図書は返却台に返却する。

2. II の 1 の 3) の該当者は、所属の図書施設を通じて借用を依頼することができる。

1) 借用資料は単行本のみで、所属図書施設内での利用に限る。

2) 借用期限は2週間とするが、本研究所員からの要請があった場合には、借用期限内であっても、速やかに返却することとする。

IV. 総点検及び長期貸出

1.定期的に図書の総点検を行う。この時は、貸出期限内外を問わず、すべての図書を返却する。

2.総点検期間中、図書室を休室とすることがある。

3.図書委員会により研究室等への備え付けが認められた時は、長期貸出扱いとする。長期貸出期間は1年で、長期貸出扱いの更新は総点検時に行う。

V. その他

1.図書室資料の目録及びこの図書室利用規程については常時図書室に備え付ける。

2.資料を紛失したり汚損した場合は、代本または相当の代金で補わなければならない。

3.借用資料を期日までに返却しなかった場合、以後の貸出を一定期間停止されることがある。

4.図書室内(書庫を含む)は禁煙とする。

附則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。
平成16年4月1日制定

5. サル類飼育頭数・動態

2006 年度（平成 18 年度末）飼育頭数

種名	頭数
コモンマーモセット	21
ワタボウシタマリン	25
ヨザル	16
リスザル	4
フサオマキザル	11
ケナガクモザル	1
ミドリザル	2
ニホンザル	334
ニホンザル(NBR) *	73
アカゲザル	199
タイワンザル	7

種名	頭数
ブタオザル	1
ボンネットザル	9
カニクイザル	45
マントヒヒ	6
アジルテナガザル	3
チンパンジー	14
合 計	771

*NBR（「ニホンザル」バイオリソースプロジェクト）の預託を受け飼育しているもの

2006 年度（平成 18 年度）サル類動態表

区 分 種 名	増 加		減少（死亡など）										
	出 産	導 入	実 験 殺	事 故 死	外 傷 死	呼 吸 器 系 疾 患	消 化 器 系 疾 患	感 染 症	泌 尿 器	衰 弱	そ の 他	剖 検 不 能	譲 渡
コモンマ - モセット	6		1			1				1	3		
ワタボウシタマリン	2		4										
ニホンザル	56		29		1	5	2	1			10		
ニホンザル(NBR)	12				1	2				1	3		
アカゲザル	39		26	1	1	1	1		1	1	3		
タイワンザル			1										
カニクイザル	7		8										
セレベスマカク							1						
マントヒヒ	1				1								
ミタス			1										
フサオマキザル						1							
リスザル						1							
小 計	123	0	70	1	4	11	4	1	1	3	19		0
合 計	123		114										

6. 資料

霊長類研究所が所蔵する資料は、骨格標本、液浸標本、化石模型などからなり、外部の研究者にも基本的にすべて公開されている。標本のほとんどはデータベース化されており、資料委員会の許可にもとづいて利用希望者に提供され、研究遂行上の必要に応じて貸し出しもおこなっている。他機関所蔵の資料との交換も受け入れている。

(1) 霊長類骨格資料(表 1)

現在、資料委員会のデータベースに登録された霊長類骨格標本は表 1 の通りである。その数は 7,000 点を超え、大部分はマカク類を中心とした旧世界ザルの標本である。その他に、新世界ザルの標本も約 1,400 点保有している。類人猿、および原猿類(+ツパイ)の標本は、それぞれ数十点ずつである。

(2) 霊長類以外の骨格標本(表 2)

霊長類以外にも、哺乳類を中心に約 1,400 点近い骨格標本を所蔵している。内訳は、タヌキ、キツネ、ツキノワグマ、テン、イタチ、イノシシ、シカ、カモシカなど日本産哺乳類が多い。日本産の野生哺乳類が減っている現在、これらは貴重な資料である。

骨格標本はすべて研究所新棟 4 階と本棟地下の骨格資料室において移動式標本架にならべて保管されている。標本は種ごとに分類され、種内では標本番号にしたがって配列されている。利用希望者は、資料室に設置されたコンピューター上で骨格標本データベースを検索することができる。データベース上で利用できる情報は、標本番号、種番号、属名、種名、登録日、性別、体重、座高、前胴長などである。

(3) 液浸標本

本棟地下の液浸資料室に各種霊長類のホルマリンもしくはアルコールで固定された液浸標本が数百点保管されており、共同利用研究者などを対象に、研究・教育目的で提供されている。これらについてもデータベース化が進められている。

(4) その他

以上の他に、被毛標本数十点が保有されている。

霊長類研究所資料委員会は国内外の多くの研究者がこれらの資料を利用して研究を進めることを希望しており、利用希望者の要請にできるだけ応えたいと考えている。そのため、上記のように研究所所蔵資料のデータベース化など利用環境の整備に努めており、毎年国内外の研究者らによって骨格標本や液浸標本が研究・教育用の資料として活用されている。標本の利用許可については、非破壊的な使用目的の場合は簡便な手続きで済むようにしているが、標本の破壊が必要だったり破損の恐れのある利用の際は資料委員会への十分な事前説明が必要である。

資料委員会は新しい標本の作製、受け入れもおこなっており、毎年標本数は増加している。資料を一層充実させるため、野外調査などの際に、霊長類その他の標本の採集にご協力いただきたい。

備考：資料委員会では、霊長類研究所資料室で登録・保管する他、霊長類標本に関するデータのための登録も受け付けています。あるいは、標本管理者の移籍・退職などによって管理困難となった標本の取り扱いについても相談を受けます。霊長類研究所資料委員会までご連絡ください。

(平成 19 年度連絡先：endo@pri.kyoto-u.ac.jp)。

(文責：遠藤秀紀)

2006 年度（平成 18 年度）所蔵骨格資料

表 1 霊長類骨格資料

和名	学名	標本数
ホミノイド	Hominoidea	83
テナガザル属	<i>Hylobates spp.</i>	53
チンパンジー属	<i>Pan troglodytes</i>	24
ゴリラ属	<i>Gorilla gorilla</i>	5
オランウータン属	<i>Pongo pygmaeus</i>	1
旧世界ザル	Cercopithecoidea	5693
マカク属	<i>Macaca spp.</i>	4004
ラングール属	<i>Presbytis spp.</i>	176
コロブス属	<i>Colobus spp.</i>	362
コバナテングザル属	<i>Simias concolor</i>	132
グエノン属	<i>Cercopithecus spp.</i>	566
パタス属	<i>Erythrocebus patas</i>	16
マンガベイ属	<i>Cercocebus spp.</i>	16
ヒヒ属	<i>Papio spp.</i>	403
マンドリル属	<i>Mandrillus spp.</i>	18
新世界ザル	Ceboidea	1423
リスザル属	<i>Saimiri sciureus</i>	985
ヨザル属	<i>Aotus trivirgatus</i>	57
ティティ属	<i>Callicebus spp.</i>	49
ホエザル属	<i>Alouatta spp.</i>	49
クモザル属	<i>Ateles spp.</i>	8
ウーリークモザル属	<i>Brachyteles spp.</i>	3
ウーリーモンキー属	<i>Lagothrix spp.</i>	16
オマキザル属	<i>Cebus spp.</i>	84
サキ属	<i>Pithecia spp.</i>	13
ウアカリ属	<i>Cacajao calvus</i>	1
ゲルディモンキー属	<i>Callimico goeldi</i>	1
ビグミーマーモセット属	<i>Cebuella pygmaeus</i>	6
マーモセット属	<i>Callithrix spp.</i>	59
タマリン属	<i>Saguinus spp.</i>	86
ライオンタマリン属	<i>Leontopithecus rosalia</i>	6
原猿類およびツパイ類	Prosimii & Tupaia	67
ツパイ属	<i>Tupaia spp.</i>	43
オオツパイ属	<i>Lyonogale spp.</i>	1
キツネザル属	<i>Lemur spp.</i>	6
エリマキキツネザル属	<i>Varecia spp.</i>	2
スローロリス属	<i>Nycticebus spp.</i>	7
ポッター属	<i>Perodicticus spp.</i>	1
ガラゴ属	<i>Galago spp.</i>	6
メガネザル属	<i>Tarsius spp.</i>	1
総計		7266

表 2 その他の骨格資料

和名	学名	標本数
食肉目	Carnivora	912
イヌ科	<i>Canidae</i>	552
ネコ科	<i>Felidae</i>	23
クマ科	<i>Ursidae</i>	132
アライグマ科	<i>Procyonidae</i>	5
イタチ科	<i>Mustelidae</i>	180
ジャコウネコ科	<i>Viverridae</i>	20
奇蹄目	Perissodactyla	8
ウマ科	<i>Equidae</i>	6
バク科	<i>Tapiridae</i>	2
偶蹄目	Artiodactyla	349
ウシ科	<i>Bovidae</i>	50
シカ科	<i>Cervidae</i>	38
イノシシ科	<i>Suidae</i>	257
ベッカリー科	<i>Tayassuidae</i>	3
不明	<i>indet.</i>	1
齧歯目	Rodentia	68
ネズミ科	<i>Muridae</i>	22
リス科	<i>Sciuridae</i>	33
テンジクネズミ科	<i>Caviidae</i>	3
ヌートリア科	<i>Myocastoridae</i>	1
ヤマアラシ科	<i>Hystricidae</i>	1
オマキヤマアラシ科	<i>Erethizontidae</i>	1
カピバラ科	<i>Hydrochoeridae</i>	1
パカ科	<i>Agoutidae</i>	2
不明	<i>indet.</i>	4
ウサギ目	Lagomorpha	10
ウサギ科	<i>Leporidae</i>	9
ナキウサギ科	<i>Ochotonidae</i>	1
食虫目	Insectivora	1
モグラ科	<i>Talpidae</i>	1
有袋目	Marsupialia	6
オポッサム科	<i>Didelphidae</i>	2
ウォンバット科	<i>Vombatidae</i>	1
カンガルー科	<i>Macropodidae</i>	2
クスクス科	<i>Phalangeridae</i>	1
貧歯目	Edentata	2
フタユビナマケモノ科	<i>Megalonychidae</i>	2
長鼻目	Proboscidea	1
クジラ目	Cetacea	9
マイルカ科	<i>Delphinidae</i>	9
鰭脚目	Pinnipedia	16
アシカ科	<i>Otariidae</i>	14
哺乳類・計		1382
爬虫類		4
魚類		1
総計		1387

7. 人事異動

所属	職名	異動		内容	備考
		氏名	年月日		
系統発生 行動発現	所長	松沢哲郎	2006/4/1	併任	任期は 2008/3/31 まで。 任期は 2007/3/31 まで。 系統発生分野・助手より。 科学技術振興事業団 CREST 研究 員より。
	副所長	景山節	2006/4/1	併任	
	教授	高井正成	2006/4/1	昇任	
	助教授	宮地重弘	2006/4/1	採用	
センター	助手	宮部貴子	2006/5/1	採用	東京大学大学院農学生命科学研 究科博士後期課程生より。
センター	技術職員	渡邊祥平	2006/6/1	採用	人類進化モデル研究センタ ー・技能補佐員より。
センター	技術職員	渡邊朗野	2006/6/20	改姓	旧姓：加藤
比較認知	寄附研究部門助教授	佐藤弥	2006/10/1	採用	京都大学文学研究科研究員 (COE)より。
比較認知	寄附研究部門助手	林美里	2006/10/1	採用	京都大学大学院理学研究科博士 後期課程在学学生より。
社会構造	助教授	半谷吾郎	2006/10/1	採用	日本学術振興会海外特別研究員 より。
センター	技術職員	渡邊朗野	2007/1/17	育児休業 取得	2007/12/31 まで。
センター	技術職員	西脇弘樹	2007/1/17	採用	人類進化モデル研究センター・ 技能補佐員より。
系統発生 野外施設	助教授	相見満	2007/3/31	定年退職	兵庫県立大学自然・環境科学研 究所附属森林動物研究センタ ー・教授へ。
	助教授	室山泰之	2007/3/31	辞職	

センター：附属人類進化モデル研究センター， 野外施設：附属ニホンザル野外観察施設，

比較認知：比較認知発達（ベネッセコーポレーション）研究部門

8. 海外渡航

(1) 2006 年度（平成 18 年度）教職員一覧

所属	氏名	期間	目的国	目的
形態進化	濱田穰	2006/4/17～6/6	タイ王国・ラオス 人民民主主義共和 国	タイ・ラオスにおけるマカク分布調査・ 研究打ち合わせ
生態機構 認知学習 思考言語	M.A.Huffman	2006/4/25～5/2	台湾	研究連絡・講演・野外観察
	正高信男	2006/6/20～6/26	フランス共和国	研究連絡・研究打ち合わせ
	松沢哲郎	2006/6/21～7/4	ウガンダ共和国	第 21 回国際霊長類学会参加・発表，資 料収集
生態機構	M.A.Huffman	2006/6/22～7/6	ウガンダ共和国	第 21 回国際霊長類学会参加・発表，資 料収集及び野外観察
生態機構	橋本千絵	2006/6/24～7/8	ウガンダ共和国	第 21 回国際霊長類学会出席，資料収集， 野生チンパンジー調査

多様性保全 研究	香田啓貴	2006/7/15～9/28	インドネシア共和国・マレーシア	テナガザルの行動学的調査・研究打ち合わせ
認知学習	松井智子	2006/7/16～8/1	カナダ	研究打ち合わせ，学会出席・発表・資料収集
形態進化	遠藤秀紀	2006/7/19～7/25	アメリカ合衆国	哺乳類骨格標本の形態学的検討，収蔵状況調査
形態進化	濱田穰	2006/7/23～8/2	ミャンマー連邦・タイ王国	研究打ち合わせ，マカク分布生息実態調査
思考言語	松沢哲郎	2006/7/27～8/2	アメリカ合衆国	国際シンポジウム参加・講演・資料収集
形態進化	國松豊	2006/8/12～10/9	ケニア共和国	野外調査，化石観察及び資料収集
系統発生	高井正成	2006/8/26～9/5	ロシア連邦	国際第四紀学会出席・発表，研究連絡
遺伝子情報	中村伸	2006/8/30～9/2	大韓民国	第2回アジア実験動物学会出席・発表
遺伝子情報	浅岡一雄	2006/9/1～9/11	スイス連邦	研究連絡，第17回核酸国際会議出席・発表・資料収集
生態機構	M.A.Huffman	2006/9/9～9/17	イタリア共和国	イタリア動物行動学会参加・講演，資料収集
形態進化	濱田穰	2006/9/10～10/1	ベトナム社会主義共和国	研究打ち合わせ，第15回東南アジア動物園協会大会参加・発表，野外調査
野外施設	渡邊邦夫	2006/9/19～10/3	インドネシア共和国	研究連絡・シンポジウム参加・野外調査
遺伝子情報	中村伸	2006/9/26～10/4	アメリカ合衆国・台湾	国際カンファレンス出席，研究打ち合わせ
系統発生	高井正成	2006/9/27～10/8	ロシア連邦	化石標本の観察・計測・同定
センター	宮部貴子	2006/9/30～10/5	アメリカ合衆国	学会出席
行動発現	三上章允	2006/10/13～10/20	アメリカ合衆国	第36回北米神経科学大会出席及び発表
形態進化	濱田穰	2006/10/17～10/28	バングラデシュ人民共和国・タイ王国	野外調査及び研究打ち合わせ
器官調節	清水慶子	2006/10/24～10/28	タイ王国	国際シンポジウム出席・発表・資料収集，研究連絡
センター	上野吉一	2006/10/25～10/31	タイ王国	研究打ち合わせ・資料収集
社会構造	半谷吾郎	2006/10/26～11/7	マレーシア	野外調査
行動発現	三上章允	2006/10/28～11/7	タイ王国	テナガザルの血液サンプル採取・研究連絡
形態進化	遠藤秀紀	2006/10/30～11/4	ミャンマー連邦・タイ王国	家禽・家畜集団に関する形態学的多様性の検討
形態進化	濱田穰	2006/11/12～12/6	ミャンマー連邦・タイ王国	野外調査，研究打ち合わせ，資料収集
行動発現	三上章允	2006/11/14～11/23	ドイツ連邦共和国・ベルギー王国	研究打ち合わせ
野外施設	渡邊邦夫	2006/11/15～11/21	中華人民共和国	研究連絡・発表
遺伝子情報	平井啓久	2006/11/15～12/6	インドネシア共和国・マレーシア	野外調査及び実験・研究打ち合わせ
認知学習	松井智子	2006/11/20～12/7	英国・ドイツ連邦共和国	研究打ち合わせ，情報収集，ワークショップ出席

思考言語	松沢哲郎	2006/11/22 ~ 12/10	ギニア共和国・フランス共和国	ボッソウ 30 周年国際シンポジウム参加・発表，研究連絡，野外調査
行動発現	三上章允	2006/12/16 ~ 12/22	インドネシア共和国	研究連絡，行動実験
社会構造	半谷吾郎	2006/12/21 ~ 2007/1/6	マレーシア	野外調査
生態機構	橋本千絵	2006/12/24 ~ 2007/1/9	ウガンダ共和国	野生チンパンジーの生態学的調査
形態進化	遠藤秀紀	2006/12/27 ~ 12/30	ベトナム社会主義共和国	研究打ち合わせ，標本検索
形態進化	濱田穰	2007/1/12 ~ 1/22	タイ王国	研究打ち合わせ・資料収集，生息実態調査
形態進化	國松豊	2007/1/13 ~ 1/27	ベトナム社会主義共和国	霊長類化石標本調査
器官調節	清水慶子	2007/1/25 ~ 1/28	台湾	アジア野生動物医学会ワークショップ，研究連絡
生態機構	M.A.Huffman	2007/2/2 ~ 3/1	スリランカ民主社会主義共和国	野外調査，研究連絡
社会構造	半谷吾郎	2007/2/4 ~ 2/14	マレーシア	野外調査
系統発生	高井正成	2007/2/5 ~ 2/22	ミャンマー連邦	発掘調査・資料収集・研究打ち合わせ
認知学習	正高信男	2007/2/7 ~ 2/10	マレーシア	調査・観察
形態進化	國松豊	2007/2/11 ~ 2/25	ベトナム社会主義共和国・タイ王国	野外調査・研究連絡・標本調査
センター	上野吉一	2007/2/23 ~ 3/2	ドイツ連邦共和国・英国・オランダ王国	動物園視察及び資料収集
生態機構	橋本千絵	2007/2/27 ~ 3/20	ウガンダ共和国	野生チンパンジーの生態学的調査
系統発生	高井正成	2007/3/15 ~ 3/25	フランス共和国・スイス連邦	化石頭骨 CT 撮影・化石標本観察
形態進化	遠藤秀紀	2007/3/15 ~ 3/24	タイ王国・ラオス人民民主主義共和国	研究会議参加・資料解析・標本調査
社会構造	半谷吾郎	2007/3/15 ~ 3/24	マレーシア	研究打ち合わせ・野外調査・資料収集
生態機構	M.A.Huffman	2007/3/16 ~ 3/25	台湾	講演・研究連絡
思考言語	松沢哲郎	2007/3/20 ~ 4/3	アメリカ合衆国	国際シンポジウム参加・講演・資料収集
認知学習	松井智子	2007/3/20 ~ 4/5	アメリカ合衆国	国際シンポジウム参加・発表，学会参加・発表，資料収集
思考言語	友永雅己	2007/3/21 ~ 4/3	アメリカ合衆国	国際シンポジウム参加・発表，乳幼児発達学会参加・発表，資料収集
比較認知	林美里	2007/3/21 ~ 4/3	アメリカ合衆国	国際シンポジウム参加・発表，乳幼児発達学会参加・発表，資料収集

(2) 2006 年度（平成 18 年度）非常勤研究員一覧

所属	氏名	期間	目的国	目的
形態進化	清水大輔	2006/8/17～9/19	ケニア共和国・連 合王国	資料収集・研究打ち合わせ
系統発生 センター	江木直子	2006/9/26～10/13	スイス連邦	資料収集・解析及び研究打ち合わせ
	竹元博幸	2007/1/11～2/20	コンゴ民主共和国	野外調査・研究連絡・資料収集

(3) 2006 年度（平成 18 年度）教務補佐員一覧

所属	氏名	期間	目的国	目的
思考言語	井上紗奈	2006/6/20～7/6	ウガンダ共和国	国際霊長類学会参加・発表・資料収 集・野外観察
センター	松原幹	2006/6/22～7/6	ウガンダ共和国	国際霊長類学会参加・発表・資料 収集・野外観察
生態機構	笠原聡	2006/9/12～2007/3/20	ウガンダ共和国	野外調査・研究連絡
行動発現	井上雅仁	2006/10/13～10/20	アメリカ合衆国	北米神経科学会出席・資料収集
遺伝子情報	光永総子	2006/10/21～10/25	フィリピン	共同研究・研究連絡
思考言語	大橋岳	2006/11/1～2007/1/18	ギニア共和国	ボツソウ 30 周年国際シンポジウム 参加・発表・資料収集・野外調査
思考言語	野上悦子	2007/2/11～3/3	ウガンダ共和国	野外調査・資料収集
センター	戸塚洋子	2007/2/23～3/2	ドイツ連邦共和国・ 英国・オランダ王国	施設見学・資料収集
思考言語	落合(大平)知美	2007/3/7～3/16	マレーシア	野外調査・資料収集

(4) 2006 年度（平成 18 年度）大学院生一覧

所属	氏名	期間	目的国	目的
思考言語	松野響	2006/5/4～5/12	アメリカ合衆国	Vision Sciences Society 6th Annual Meeting 参加・発表及び資料収集
思考言語	林美里	2006/6/20～7/6	ウガンダ共和国	国際霊長類学会参加・発表・資料収 集・野外観察
思考言語	山本真也	2006/6/21～7/4	ウガンダ共和国	国際霊長類学会参加・発表・資料収 集
思考言語	LauraMartinez	2006/6/21～7/9	オランダ王国・ウガ ンダ共和国・ベルギ ー王国	国際霊長類学会参加・発表・資料収 集・野外観察
野外施設	張鵬	2006/6/22～7/11	ウガンダ共和国	国際霊長類学会参加・発表・資料収 集・野外観察
野外施設	Rizaldi	2006/6/22～7/6	ウガンダ共和国	国際霊長類学会参加・発表・資料収 集・野外観察
生態機構	C.A.D.Nahallage	2006/6/22～7/6	ウガンダ共和国	国際霊長類学会参加・発表・資料収 集・野外観察
野外施設	Rizaldi	2006/7/13～7/27	オーストラリア	研究連絡
認知学習	親川千紗子	2006/7/15～9/28	インドネシア共和国	研究打ち合わせ・野外調査
野外施設	Rizaldi	2006/8/15～9/16	インドネシア共和国	野外調査
遺伝子情報	Jeong A-Ram	2006/8/25～9/3	大韓民国・オースト リア	研究連絡・学術大会参加及び資料 収集

系統発生	Thaung Htike	2006/9/9 ~ 10/8	ミャンマー連邦共和国	研究打ち合わせ・野外調査
器官調節	託見健	2006/10/13 ~ 10/20	アメリカ合衆国	北米神経科学会出席・資料収集
行動発現	半田高史	2006/10/13 ~ 10/20	アメリカ合衆国	北米神経科学会出席・資料収集
思考言語	Laura Martinez	2006/11/16 ~ 12/2	ギニア共和国・フランス共和国	ボッソウ 30 周年国際シンポジウム 参加・発表・資料収集
形態進化	山本亜由美	2007/1/16 ~ 3/18	ケニア共和国・ ベトナム社会主義共和国	霊長類化石標本調査
認知学習	親川千紗子	2007/1/24 ~ 2/8	フランス共和国	研究連絡・音響分析及び資料収集
生態機構	C.A.D.Nahallage	2007/1/6 ~ 3/20	スリランカ	野外調査・研究連絡・資料収集
野外施設	張鵬	2007/1/8 ~ 2/25	中華人民共和国	野外調査・研究連絡・資料収集
系統発生	Zin Maung Maung Thein	2007/2/3 ~ 3/19	ミャンマー連邦共和国	野外調査・研究連絡・資料収集
センター	小倉匡俊	2007/2/23 ~ 3/2	ドイツ連邦共和国・ 英国・オランダ王国	施設見学・資料収集
生態機構	松岡絵里子	2007/2/27 ~ 3/20	ウガンダ共和国	野外調査・資料収集
社会構造	鈴木真理子	2007/3/15 ~ 3/26	マレーシア	野外調査・資料収集
認知学習	親川千紗子	2007/3/15 ~ 3/26	マレーシア	野外調査・資料収集

センター：附属人類進化モデル研究センター， 野外施設：附属ニホンザル野外観察施設，
比較認知：比較認知発達（ベネッセコーポレーション）研究部門

（2006 年度（平成 18 年度）日本学術振興会特別研究員（PD）の海外渡航はなし）

9. 非常勤講師

(理) 三中信宏 (独) 農業環境技術研究所 上席研究員)

「系統樹思考とアブダクション」

2006 年 10 月 17 日～10 月 18 日

(霊) 開一夫 (東京大学大学院情報学環・学際情報学府
助教授)

「自己他者認知とコミュニケーションの発達」

2006 年 11 月 15 日～11 月 17 日

(理) 中村俊 (国立精神・神経研究センター神経研究所
診断研究部長)

「コミュニケーション行動の神経生物学」

2006 年 11 月 21 日～11 月 22 日

(理) 大浦宏邦 (帝京大学経済学部経営学科 助教授)

「進化ゲーム理論 群れの成立メカニズム」

2007 年 1 月 17 日～1 月 18 日

(理): 理学研究科 卒 (霊): 霊長類研究所 卒

10. リサーチ・アシスタント (R・A)

氏名	採用期間
半田高史	2006 年 5 月 1 日～2007 年 3 月 31 日
鈴木真理子	2006 年 5 月 1 日～2007 年 3 月 31 日
木場礼子	2006 年 5 月 1 日～2007 年 3 月 31 日
託見健	2006 年 5 月 1 日～2007 年 3 月 31 日
Jeong A-Ram	2006 年 5 月 1 日～2007 年 3 月 31 日
檜垣小百合	2006 年 11 月 1 日～2007 年 3 月 31 日

11. ティーチング・アシスタント (T・A)

霊長類学系科目に係るもの

氏名	採用期間
村田貴朗	2006 年 7 月 1 日～2007 年 2 月 28 日
佐藤義明	2006 年 7 月 1 日～2007 年 2 月 28 日
福島美和	2006 年 7 月 1 日～2007 年 2 月 28 日
東濃篤徳	2006 年 7 月 1 日～2007 年 2 月 28 日

全学共通科目に係るもの

氏名	採用期間
原澤牧子	2006 年 6 月 1 日～2006 年 7 月 31 日
小倉匡俊	2006 年 6 月 1 日～2006 年 7 月 31 日
松岡絵里子	2006 年 9 月 1 日～2006 年 9 月 30 日
小薮大輔	2006 年 9 月 1 日～2006 年 9 月 30 日